

# 緑の地球

## GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



10月22日～23日に芦生の森合宿をおこない、秋の京大芦生研究林を散策した。

### Contents

- 大同の旅（後半） ..... P 2
- 年末寄付のお願い ..... P 2
- 運営懇談会のご案内 ..... P 3
- GENなんでも勉強会オンライン参加者募集 ..... P 4
- 芦生の森合宿の報告 ..... P 6



GEN公式サイトリンク

2022.11

208

認定特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク



## 大同の旅 (後半)

李建華 (北京同心社文化有限公司代表)

通訳の手配など長年GENの活動を支えてくれた北京同心社の李建華さんがこの夏大同を訪れ、手記を寄せてくれました。今回は後半です。李さん大同訪問時の写真や動画はGENのFacebook、Instagramで紹介していますのでぜひあわせてご覧ください。

郭宝青さんの案内でカササギの森へ行った。未舗装の山道だった道路はアスファルトに変わり、峡谷の高所の至るところに風力発電の風車がそびえている風景に、3年ぶりに訪れたという郭さんも驚きの声を上げた。「風力発電の高さはどれくらいですか」と高見さんからWeChatできた質問に、「さあ、どのくらいあるだろうね、昔に30mもあるプロペラをトラックで運んだことがあるら、70か、ひょっとしたら100mあるかもしれないね」と郭さん。20年も前に甘肅から新疆へ走る途中、荒れ果てた砂漠に見渡す限り風力発電機が立ち並んでいる風景を見たことはあるが、山の一面にそびえる風景を見るのは初めてで圧巻だった。人里から離れているので騒音の心配はないだろう。

カササギの森に「長春外国語学校1963日本語組植樹記念」とある石碑が目に入った。高見さんが綴られた本、中国語版『雁棲塞北』に感動を覚えて、2006年に長春外国語学校同窓生たちがカササギの森のここに油松を植えた。程永華元駐日大使もその一人だった。なよなよの苗木を荒地に植えて、5年後再会した苗木悲鳴をあげたいほどただの30cmぐらいだった。最初の5年は松の木には大変重要な段階で、管理はすこしも怠慢が許されな



い。その裏には地元の人間の大変な苦勞がうかがわれる。2016年の3回目の訪問では、油松はすでに1~2mに育ち、その後の成長は間違いなからうが、この目で確かめないと落ち着かなかった。コロナ禍で昨年は5年ごとのカササギの森訪問がかなわなかったので、気がかりでカササギの森に飛んできたのだ。自分が汗を流して植えた木は、わが子を育てるような心境となり、身を投じて直に参加したのでなければ、こんなこだわりはないだろう。その心意気を大事にしないといけないと、つくづく思った。背たけが3.5m、幹が太く成長したのを目の当たりにして、こみ上げる喜びは格別だった。地球環境のために、風砂を減らすために私たちに力を出してきたのだ。

樹齢16歳だと聞いて、孫娘は私より年上なのと、記念碑のすぐそばに枝を

埋め、来年はどのくらい成長するだろうとつぶやいた。のちにクラスメートたちに写真・動画添付で報告すると、あんなにか弱い苗木が、今ではこうもたくましく成長してくれるなんて信じられない、と一様に感無量だった。そして来年は同窓60年の記念に、カササギの森に集まって記念クラス会を開こう、と口をそろえた！ カササギの森は継続的に訪れ、自分たちが植えた木の成長ぶりを見守る場所として造成されたのだが、これが効果てきめん。いまでもカササギの森に自分で植えた木の成長ぶりを一目見たいと念じている人が多いだろう。すぐ隣に経団連、東北電力、イオン労組、武村正義の植樹記念碑があった。コロナ禍で来られないのが歯がゆく情けないものだ。

600haに及ぶ丘陵地帯のカササギの森の管理は、地元聚楽郷政府に移ったようだ。山の下のほうの林はあまりにも密植しているため、枝が枯れている様子が見られ、これはやばいと郭さんが眉をひそめた。間伐をしないと共倒れになっちゃうだろうという。心配だ。来年再び来る時はどうなっているかなと思いつつ、帰京の途についた。

## 年末寄付のお願い

7月の会報で夏季寄付を呼び掛けたところ、たくさんの方にご協力いただき大変感謝しております。しかしコロナの出口が見えないなか、GENの会計は大変厳しい状況が続いています。30年以上続いた活動の継続のため、可能な範囲でのみなさまのご協力をお願いいたします。

緑化基金、運営資金、東北海岸林再生、どの項目への寄付も歓迎いたします。おまかせ寄付にさせていただくと最も必要とされている部分に充当させていただきます。

発送作業の都合上、郵便振替の用紙を一律に同封します。最近にご協力いただいたかたには重ねてのお願いではありませんのでご了承いただきますようお願いいたします。クレジットカードでの寄付も可能です。くわしくはGENのホームページ (<https://gen-tree.org/support/>) をご覧ください。

【GENへの寄付は税制上の優遇措置を受けられます】

緑の地球ネットワークは大阪市に認定NPO法人された認定NPO法人です(期限は2024年4月8日まで)。個人によるGENへの寄付は、税額控除あるいは所得控除を受けられます。対象となるのは2,000円を超える寄付金で、確定申告が必要です。企業からの寄付金は一般寄付金の損金算入限度額とは別枠の損金算入限度額が認められています。

また、個人が相続または遺贈により取得した財産を、相続税の申告期限以前に認定NPOに寄付すると、相続税の課税対象から除外されます。GENの場合、寄付金となるのは緑化基金、運営カンパ、おまかせカンパと会費のうち1口を超える部分、賛助会費から12,000円を引いた金額です。また、大阪府民、大阪市民のかたには個人住民税の控除もあります。くわしくはGENまで。

## 運営懇談会にご参加ください

運営懇談会は、年に一度GEN会員が集い、GENの活動について自由に議論する場です。これまでの活動を振り返って思うことや今後についてなど、みなさんのご意見をぜひお聞かせください。今年はオンラインと会場を併用しておこないます

○日時：2022年12月10日(土)13時30分~16時30分ごろ

○参加方法：Web会議システムZoomまたは会場での参加

○会場：大阪産業創造館6階会議室C(大阪市中央区本町1-4-5 大阪メトロ中央線・堺筋線「堺筋本町」駅

より徒歩5分)

○参加費：無料

○参加方法：参加を希望される方は12月8日(木)までに表題を「運営懇談会参加」としてGENまで(gen@gen-tree.org)メールをお送りください。メール送付の際、会場での参加かオンラインでの参加かをお知らせください。オンライン参加の方には後日メールにてZoomのミーティングIDとパスワードをお知らせします。12月9日(金)までにZoomの案内が届かない場合はGEN事務所までご連絡ください。

## 大同緑化協力25年の軌跡

### 農民の意識調査

GENの山西省大同市での25年の緑化協力を振り返り、当時の写真も交えてシリーズでご紹介します。今回で33回目です。(高見邦雄)

環境省の調査事業を受託して、「黄土高原における緑化の可能性調査」に取り組んだのは、2000年のことです。その一環で「緑化についての農民の意識調査」を実施しました。

中国でのアンケートなんか無意味だとの指摘もあり、設問に工夫を重ねました。世話人会で煮詰めたあと大同のカウンターパートにみせると、「おもしろい! こんな調査は誰もやったことがない」といって、こちらの希望を上回る7県の21村で950人を対象にして実施し、900枚を回収してくれました。

集計は21村の全体と、5県から典型的な村1つずつを選び、合計6つについて行いました。最初の設問にこれまで植林に取り組んだ日数、その目的などを上げています。全体では作業日数500日以上が37.7%、100~500日が28.3%で、100日以上の方が3分の2に達し、先進の霊丘県上北泉村では500日以上だけで70%に達しています。熱心に取り組まれていることを再確認しました。

緑化の目的としては、金になる30.8%、利用できる39.8%、水土流失や風砂の防止74.6%、美観や環境67.6%、善行

を積む25.1%、しかたない2.0%で、水土流失や環境問題が切実な課題として農民に浸透していることを実感しました。

水にたいする項目を加えました。不自由しないし灌漑も可42.6%、生活用水は足りるが灌漑は無理47.4%、飲み水はあるが節約が必要18.3%、飲み水に事欠きもらい水3.6%。大同の新聞が「飲み水に困る人が30万人近い」と報道するなかで水に困る割合が低いと感じました。

それにあわせて1日に一家で使う水の量を尋ねています。全体平均で23.8ℓ、最少の村(大同県遇駕山村)は15.6ℓでした。さすがにこの村では、飲み水はあるが節約が必要53.3%、もらい水に通う23.3%と、その苦境が見てとれます。

ほかの村についてもその使用量をみると、24.5ℓ、31.0ℓ、16.6ℓ、21.4ℓで、これには家畜の飲み水も含まれており、余裕はありません。この時期までは出稼ぎその他で外にでることは稀で、異なる暮らしを知らないために、不自由と感じなかったのでしょうか。

大同での緑化協力についてYouTubeで動画を配信しています。#20カメラマン橋本紘二さん、番外編 黄土高原の戦争の記憶と橋本さんを新たにアップしています。右のQRコードよりアクセスできますのでぜひご覧ください。



### note始めました

7月から配信しているメルマガ「緑の地球マガジン」をお読みいただきありがとうございます。みなさんからのコメントが励みになっています。現在noteでメルマガのアーカイブを公開しており、執筆者ごとにまとめて読むことができます。今後はブログとしても活用してしていきますので、フォローいただければ幸いです。(https://note.com/genmerumaga) 右のQRコードからも入れます。



水を運ぶ

大同の農村に通うなかで私は、人の意識や価値観はその場所で歴史的に形成されるものとの思いを強くしました。その後の変化は大きかつ急ですので、いまこのような調査をやるとどんな結果がでるでしょう?

そうそう、水に困っていた大同県遇駕山村は、私たちの重要プロジェクト、実験林場・カササギの森、采涼山プロジェクトの向かいにあり、山西省で唯一水に困る村として残りました。この村で2008年に井戸掘りに協力したところ、それまで何度も失敗していたのに、みごとに成功したのです。外務省草の根無償資金協力の支援を受けました。

ここで取り上げた調査内容、JICA発行の資料集に転載されたものを以下でみることができます(P92~P113)。

<https://onl.bz/S9fZGQd>





きのこを通じて自然を知る

山田 和生さん (CASA de UME)

10月8日、北雲雀きずきの森でGEN自然と親しむ会「秋のきのこを探しに行こう」をおこない、19名が参加しました。

今回は「秋のキノコ観察会」の名の通り、あくまで「観察会」であって「キノコ狩り」ではない。「今晩はキノコ鍋か！」と勝手に期待した参加者にとっては少々残念。そもそも関西地区は暖かくて、美味しいキノコは人間より先に虫が食べてしまうそう。また、毒がないキノコであっても、食べて美味しいキノコとは限らない。今回、なんとか食べられるキノコはシバフタケだけ。講師の松本微生物研究所の栗栖さんによると、温暖化のせいかキノコの世界も以前より量も種類も少なくなっているとのこと。身近な自然も今までどおりではなくなっている。

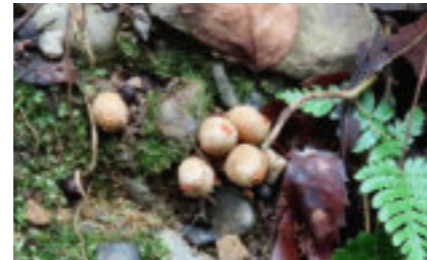
「キノコには三種類あります。」こ

れが栗栖さんの解説のポイント。まず、外生菌根菌（アマタケ、マツタケなど）樹木の細根に共生して外生菌根を作っているキノコ。次に、木材腐朽菌（シイタケ、ブナシメジ、サルノコシカケなど）木材を分解しているキノコ。最後に、落葉分解菌（スジオチバタケ、ホウライタケなど）落葉を分解しているキノコ。この三つの違いを理解すると名前までは特定できなくてもキノコ図鑑のどの部分を見れば良いか見当がつく。ちょっと賢くなった。

キノコを探して歩いた北雲雀きずきの森は、阪急の川西能勢口からバスで6分。12年前にオープンした自然公園だが、それまではゴルフ場であった。

白くて丸い変わったキノコを見つけた！と思ったらゴルフボールで、びっくり。丘陵に広がる立派な森には様々な生物が復活し、自然のたくましい回復力に驚かされる。人間がその気になれば、全国のゴルフ場を自然の森に戻すことも、キノコの山にすることもできるのではないだろうか。ゴルフなんかよりキノコ狩りの方が、楽しいと思うんだけど。

GENの自然と親しむ会、キノコの次は野鳥の観察だ。冬のバードウォッチングに期待したい。



きずきの森で見つけたクチベニタケ

からお入りください。

- ①11月25日までに件名を「11月オンライン勉強会参加希望」とし、本文にお名前を記入してGENまで (gen@gen-tree.org) メールを送る
- ②11月25日までにGENホームページの「参加する」ページより申込む
- ③11月28日(水)14時までにイベント管理サイトPeatixより申込む

12月 第1部

美山の里山暮らしから見える景色  
—京都美山かやぶき屋根の下で—

第2部

GEN自然と親しむ会：  
芦生の森合宿報告

10月の芦生の森合宿にガイドとして同行していただいた高御堂麻理子さんは、芦生の森への道のりの途中にある美山町のかやぶき屋根の家にお住まいで、自然との共生を大切にしながら生活を続けておられます。30年暮らしてきたなかから思うこと、考えることを写真とともにお伝えいただきます。また、第2部として芦生の森合宿の参加報告を行います。地球温暖化が自然豊かな芦生の森にも深刻な影響を与えている様子や鹿の害の現状など、それぞ

れの切り口で報告していただきます。

- 日時：2022年12月15日(木)19時～20時30分
- 手段：ウェブ会議システムZoom
- 講師：高御堂麻理子さん(芦生もりびと協会認定ガイド/美山町自然文化村ネイチャーガイド)
- 参加費：無料
- 申込み：以下のいずれかの方法でお申し込みください。②と③は下のQRコードからお入りください。
- ①12月13日までに件名を「12月勉強会参加希望」とし、本文にお名前を記入してGEN (gen@gen-tree.org) までメールを送る
- ②12月13日までにGENホームページの「参加する」ページより申込む
- ③12月14日14時までにイベント管理サイトPeatixより申込む

1月

木質バイオマスことはじめ

- 日時：2023年1月19日(木)19時～20時30分
- 手段：ウェブ会議システムZoom
- 講師：泊みゆきさん(NPO法人バイオマス産業社会ネットワーク)
- 参加費：無料
- ※詳細は次号でご案内します。

市民の力で里山を守る

河本 公子さん (GEN世話人)

9月29日、GENなんでも勉強会オンライン「里山の保全活動—吹田市紫金山公園と東お多福山草原の保全—」をおこない、16名が参加しました。講演部分はYouTubeで公開しているほか、GEN会員の方はホームページの「会員さま限定ページ」で質疑応答部分までご覧いただけます。GEN公式YouTubeは3ページのQRコードよりアクセスいただけます。

9月の勉強会は、武田義明さんが取り組んでおられるふたつの里山の保全活動についてお話いただきました。

ひとつめの吹田市にある紫金山公園は、1989年に市による総合公園計画が出たときに自然環境保全などの要望書を提出したところ受け入れられ、武田義明さんが会長を務める紫金山緑の会がボランティアで維持管理しているということでした。行政の計画に対して市民が待ったをかけ、それを受け入れたということ。吹田市も市民もなかなかやるな、やってやれないことはないんだな、と勇気づけられた思いでした。

ふたつめは東お多福山草原です。まず、日本の草原面積の変遷として、明治

時代の森林面積は1670万haで、現在は2500万haとのこと、対して草原は1360万haから34万haと、面積が激減。これにより草原性植物、昆虫が減り、生物多様性も減少してしまっているとのことでした。東お多福山もかつてはススキが生い茂っていましたが、ネザサにとって代わられ、人間の背丈より高く成長してしまいました。そこで年に7回のネザサ刈り取り作業、年2回のモニタリング調査をつづけているそうです。ネザサは切ってもすぐ復活するため今後も継続して刈り取りを続ける必要があるとのこと、地道に活動を続けておられます。この東お多福山草原は「未来に残したい草原の里100選」に選ばれたとのこと、選ばれ



たからには管理を続けていきたいとおっしゃっていました。

市民による地道な活動により里山が守られているというお話でしたが、課題も抱えており、共通する一番の課題は組織の高齢化だそうで、運営をできる人材がいなくなっているとのことでした。GENとも共通する課題です。

2か所とも関西にありますので、今後GENの自然と親しむ会で活動に参加させてもらえたらうれしいです。



吹田市にある紫金山公園

また訪れたい、東北の海岸林

小西 美保子さん (GEN世話人)

10月13日、GENなんでも勉強会オンライン「ゆりりん愛護会と地域活動」をおこない、12名が参加しました。講演部分はYouTubeで公開しているほか、GEN会員の方はホームページの「会員さま限定ページ」で質疑応答部分までご覧いただけます。GEN公式YouTubeは3ページのQRコードよりアクセスいただけます。

10月13日のGENなんでも勉強会オンライン「ゆりりん愛護会と地域活動」に参加させていただきました。

ゆりりん愛護会は2006年から宮城県名取市で海岸林の再生や、地域の子供たちの環境教育などの活動をされている団体で、会長の大橋信彦さんが「めぐる季節 めぐる生命～再生する自然と共存するという選択肢～」と題し、<sup>宮城県</sup> 閉上の海岸林のいきものたちについてお話をいただきました。

まずは大橋さんの優しいお声と語り口調がずっと耳と心に届くのが印象的でした。海岸の写真を見ながら聞くと、まるでさざ波の音のようです。写真の中のハマボウフウやハマエン

ドウなどの海浜植物やスナガニの姿はとて可愛らしいですが、2011年の東日本大震災の津波ですっかり姿を変えた海岸でいきものたちが再生する様子には力強さも感じました。

海岸林については、倒れた松に残っていた緑のマツカサが、GENの顧問でもいらっしやった故小川眞先生のご協力のもと京都で小さな苗になり、閉上の海岸に里帰りしたと伺い、命が繋がっていくことがとても嬉しかったです。

最近では地域の活動団体と協力してスナガニ調査をしたり、川の生き物マップを作って地域の人に紹介したりといった活動もされているそうです。

地域の自然と人とともに、大震災で大変な状況になりながらも活動を続けられていることに、海岸のいきものたちと同じ力強さを感じました。

GENとは小川眞先生のご縁で、2015年からスタディーツアーを派遣し、以降協力関係が続いています。

私も2015年の秋のツアーで海岸林再生の植樹会に参加させていただき、仮設住宅なども案内いただきました。あれからどんな風に海岸が、そして街が変化しているのか、また現地を訪れ、直に見てみたいです。



閉上海岸のハマボウフウ





## 芦生の森合宿

10月22日～23日の日程でGEN自然と親しむ会 芦生の森合宿をおこない、12名が参加しました。参加者の報告から抜粋してご紹介します。

○10月22日：下谷コースガイドツアー

芦生山の家のガイドツアーでは、12人の参加者に対してガイドさんが2人という手厚さに驚きました。2グループに分かれての見学で、おかげで説明もじっくりかえりました。やはり白眉は大カツラでしょう。樹高38.5mのてっぺんが見えませんが、胸高直径340cm、樹冠30.5×25.5mのその巨体にはコケ類もふくめ、42種の植物が着生しているといわれています。そのなかにはヤマザクラもあり、春には花を咲かせるそうです。(東川)

森林浴で話題になるフィトンチッドの役割などはよく知らなかったが、樹木が排出するある種の物質はタネが近くに発芽するのを抑制し、一定の間隔を空けて生育できるようにする作用があるらしい。また、樹木の葉が虫に食べられると大気中にある物質を放出し、近くの同種の樹木が虫の嫌う物質を増やして防御するようになることが分かってきたそう。このような作用を植物間のコミュニケーションと言うらしい。植物個体がそんなことを考えるとは思えないが、生態系の不思議な作用である。(川島)

大きくて古い木、きのこがはえている木とはえていない木がありました。川もわたりました。スギの木にくまがひっかいたあと(クマ剥ぎ)がありました。またすぐいきたいと思います。(板野)



カツラの巨木を仰ぐ

○10月23日：長治小屋から防鹿柵見学

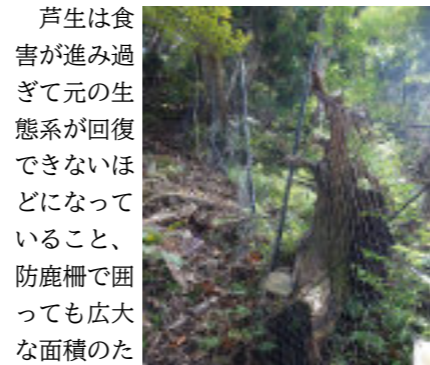
23日昼前、シカ害を防ぐ防鹿柵の谷のところに行ったが、下部に金属を編み込

んだ頑丈なネットを張り巡らしてあり、里山での対策とは違うのに、なるほどと感心した。以前、高見さんが猪名川町で借りていた「ごちそう山」を私も手伝ったが、鹿とイノシシに負けっぱなしであった。その原因は、人がしょっちゅう山に入らない、林地のそばを刈り込むことができない、収穫物とのコスパからして頑丈な防護柵やネットの費用をかけられない、などが挙げられる。わかっちゃいるけど、難しい。(宮本)

徒歩で防鹿柵のある谷まで説明を受けながら歩きました。杉林の中、小さな湿地帯、頂上にアカマツの生えている小山を見上げる草原、防鹿柵はその奥の急峻な谷の斜面に作られていました。柵の外から中を覗きましたが、確かに草木の量が多いように感じました。この先も観察、研究が続くと思います。継続が力の地味なお仕事だと思いますが、成果を期待しております。長治谷小屋への帰り道、使わなくなった資材を少し運びましたが、あの延々と続く柵の資材もこのようにして運ばなければ柵ができないことに思い至り、その大変さに頭が下がりました。(高田三智子)

生態系の様子はやはり鹿害の深刻さが印象的でした。ガイドさんや石原先生から案内があった通り、鹿害が深刻になる前は、チシマザサ等で覆われていたはずの場所が、きれいに何も無い林床になっていたことには驚きました。科学的な調査がされているだけに、その深刻さにはびっくりしています。将来、鹿の数がどのように変化していくか、まったく想像できませんが、芦生の森の多様性が長期的になんとか維持されていくといいなあと思いました。(長坂)

それにしても研究林内にはたくさんの谷があり、その斜面がマイクロバスの窓から見ると垂直に近いように感じられます。こんなところによく林道をつけ、その急斜面にスギを植えたものだと感心しました。私なんか、運転しようなんて気にはとてもなりません。(高見)



シカの食害を防ぐ防鹿柵  
芦生は食害が進み過ぎて元の生態系が回復できないほどになっていること、防鹿柵で囲っても広大な面積のたった1%にすぎないこと、回復した柵の中の種子が飛んで行くことによって柵を拡大するにも毎年5mがせいぜい(100メートル進むのに20年!)、そうやって拡大しても同じ種子の子孫だから「遺伝的多様性」という点で問題がでてくる、などのお話を伺っていると、絶妙なバランスで保たれている環境が、一旦破壊されると元に戻るのがとても難しいということがよく分かりました。(K)

○合宿を終えて

2日間の合宿を終えて、普段の生活との対比をしてみると 聞こえるのは…芦生：沢のせせらぎ・草木のざわめき、拙宅：車・電車・救急車などのサイレン。飛んでるのは…芦生：姿を捉えられない小鳥・枯れ葉・時々団栗類、拙宅：伊丹に降りていく旅客機・ヘリコプター・鳥の団体。歩くところは…芦生：未舗装林道・沢道、拙宅：人と自転車がせめぎ合う歩道・路地。要するに…芦生：大部分が自然造形物、拙宅：鳥を除いてほぼ100%人工造形物、でした。(高田望)

今回の説明の中で何度も登場した「木地師」なるものの存在をまったく知らずに参加し、恥ずかしながらツアーの後に調べて「うわ、そういうことか! あんなどころに住んでたのか! すごい!」と時間差で納得した次第です。知っていたらもっと質問できたのに。事前・事後の学習を怠るべからずという教訓も残してくれた合宿でした。(河本)



黄土高原紀行<11>

三、河は水なく、山に樹を見ず(2)

谷口 義介 (GEN会員)



写真は、渾河の上流方向にあたる。河に水はないが、黒ずんだあたりは水溜りの跡か。周りに、わずかに緑が見える。手前に平面U字形の石組み。尻を河の上流に向けているのは、洪水時の激流に対応してのものだろう。U字石組みの内側に足場と垂直穴があり、おそらく井戸と思われる。河底に水はなくても、その下には伏流水があるからだ。中央に立っている人物は、あるいは羊飼いか。

写真左側に不定形の畑地が10面ほどあり、それぞれのコーナーに刈り取った穀物(高粱?)の茎が積んである。

細い電柱が点々と見える。人の姿があまりないのは、時節がら町場に働きに行っているゆえか。

坂道を眼で追ってゆくと、その先の中腹を平らにカットしたトウモロコシ畑。さらに道は山頂までつづいている。そこも畑らしい。結果として、山に樹はない。

そして、眼前に見えるハゲ山と涸れ河には密接な関係がある。山に森林がなくなると、せつかく降った雨を保水する能力が山から失われ、河に水がなくなるからだ。

人口が多く、土地は肥えていない。膨大な人口を養うためには耕地面積を広げざるをえず、必然的に「耕して天に至る」ことになる。

これより森林という防護幕を失った高原は直ちに暴雨にさらされて、日ごとに痩せ細っていった。雨季を迎えるたびに、豪雨は沃土をさらって押し流し、テーブルほどもある数トン級の巨石が河底に当たって雷鳴

のような響きを上げるのだ。

古より中国農民が生死を託してきた水と土とは、人々の声には出せぬため息の前で、血糊のようにほとぼり流れ去ったのだ。山々から虚

しき草花の繁栄が消え去る真冬には、出血過多により褐色になった絶望の地肌が露出する。

(鄭義、藤井省三訳『神樹』、朝日新聞社、1999年、94ページ)

最も黄土高原らしい風景は、冬枯れの季節に見られるという。その意見に従って、大同ではまだ冬の三月に二度ほど行ったことがあるが、いまは晩夏八月。それでも河は涸れ、山に緑はない。

あらためて黄土高原について述べると、面積は51万7000平方キロで、中国全土の5.3パーセントを占め、日本の国土の1.5倍。東は山西省全域から西は青海省東部、北は内モンゴル自治区南部から南は河南省北部の範囲で、ここに9000万人ほどの人が住む。

中国では年収1人当たり538元(約8000円)以下を貧困層とよぶが、1998年のデータだと、全中国4200万人の貧困層のうち、1500万人が黄土高原の住民である。

年間降雨量は200~700ミリだが、地域と年によってバラつきがある。全体的にみると、6~9月に多く、10月から

翌年4月ごろまではほとんど雨が降らない。春のワーキングツアーで行って、たまたま雨が降ると、「雨を連れてきた」と言って、感謝される。

黄土高原のうち山西省で森林が占める割合を歴史的にみると、秦以前—50パーセント、唐・宋—40パーセント、遼・元—30パーセント、清—10パーセント未満と、しだいに減少。そして新中国成立時には、なんと2.4パーセントにまで落ち込んだ、という。

これには中国政府も危機感をもち、華北・東北・西北のいわゆる「三北防護林プロジェクト」や、万里の長城にそってグリーンベルトを造る「緑の長城計画」を実施したが、大同周辺での森林被覆率は、いまだ10パーセント前後とみなされている(GEN『黄土高原における緑化の可能性』2001年、25~26ページ)。

こうしたなか、1992年に発足したGENは、大同を中心に緑化活動をつづけてきた。(2016年の段階で、5920ヘクタールの面積に、1887万余りを植樹。2017年からは、河北省張家口で新プロジェクトが開始された)。

「黄土高原の植林よりも、自分のハゲ頭の植毛の方が重要だろう」と私は口の悪い友人に言われるが、苗木を1本植えるごとに山河大地が微笑するのを実感する。

「山川草木、悉皆成佛」  
懸空寺への道を急ごう。

### 万年中国語学習者のつぶやき

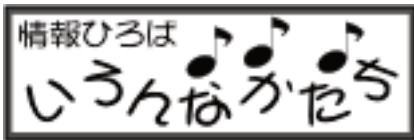
日本でこの時期発表される流行語大賞、2022年は国葬儀、オミクロン株などがノミネートされているとのこと。中国語ではどんな言葉が流行しているのでしょうか。近年よく聞かれる「内卷」という単語は、英語の「involution」訳語で、教育、仕事などの競争が激しいという意味で使わ

れています。「内卷」



とともによく語られるのが「躺平」という単語。もとは横たわるという意味ですが、欲張らない、がんばらないという意味で使われ、過度な競争社会を避けてゆっくり生きたいという「躺平主義」の人も増えているそう。心穏やかに生きたいものです。(河本)





**訪中学生団57年記念展  
1965～2022**

「斉了嗎？ 斉了！ 斉了！」

1965年から友好参観交流を続けた斉了会の活動を回顧し、当時の写真や資料などを紹介します。

- 日程：11月14日（月）～18日（金）
- 会場：中国文化センター（東京都港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1F 日比谷線「虎ノ門ヒルズ」駅A2出口徒歩2分）
- 開館時間：10時30分～17時30分（最終日は13時まで）
- 入場料：無料
- 関連イベント：事前申し込み不要。下記のお好きな時間にお越しください。11月16日（水）13時～「日中鉄鋼交流」杉本孝さん／11月16日15時～「なぜ毎年碑前祭を行うのかー藤沢・昆明を繋ぐ聾耳」岡崎雄児さん ※NPO法人田漢文化交流会主催／11月17日13時～「日中鉄道交流」浅沼唯明さん／11月18日10時30分～シンポジウム「日中関係の過去・現在・未来」ちいら会員有志
- 主催：斉了会（ちいらかい）
- 共催：中国文化センター、日本文化交流センター、全日本華人華僑青少年中国文化振興会
- 問い合わせ：井垣清明（ちいら会代表・書家 tel. 03-3933-5351）

**気候市民サミット2022オンライン  
～京都議定書採択から25年、気候危機とウクライナ危機の中で～**  
エネルギー情勢が不安定化するなか、気候危機を乗り越えられるのか。

\* 当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。  
\* 当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月15日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

- 今後の方向性を模索します。
- 日時：12月5日（月）18時～20時
  - 開催形式：Zoomウェビナー
  - プログラム：第1部 基調講演「気候危機とウクライナ危機における日本の選択（仮）」高橋洋さん（都留文科大学）第2部 報告「新電力の重要性と今後の可能性（仮）」北橋みどりさん（株式会社能勢・豊能まちづくり）／「揺るがない脱炭素シナリオ（仮）」明日香壽川さん（東北大学）／「市民社会・地域で取り組む気候変動の運動（仮）」今井絵理菜さん（神戸の石炭火力発電を考える会）進行：櫻田彩子さん（エコアナウンサー）
  - 申込み：気候ネットワークHPイベントページ（<https://www.kiconet.org/event/2022-12-05>）よりお申込みください。
  - 主催・お問合せ：NPO法人気候ネットワーク京都事務所 URL <https://www.kiconet.org> tel.075-254-1011 e-mail: kyoto@kiconet.org

**南京の記憶をつなぐ2022  
ドキュメンタリー上映／講演  
安全ではなかった  
南京国際安全地区**

- 日中戦争時の南京安全地区についてのドキュメンタリーと講演です。
- 日時：12月10日（土）14時～（13時30分開場）
  - 場所：ドーンセンター7階ホール（大阪メトロ／京阪「天満橋」駅）
  - 資料代：1,000円

- プログラム：ドキュメンタリー映像「ミニー・ヴォートリン 南京よ、とこしえに」／笠原十九司さん（都留文科大学名誉教授・歴史学者）講演「南京国際安全区について」ビデオメッセージ／松岡環さん（銘心会南京／日中平和研究会代表）講演「国際安全区で命をかけた人たち」
- 主催・問合せ：南京の記憶をつなぐ2022 tel. 090-8125-1757

**おいしいポンカン  
いかがですか**

★甲浦ポンカン（低農薬・動物性有機肥料のみ使用）

【歳暮・贈答用化粧箱入り】

A	2L/3L	5kg	30個前後	4,200円
B	2L/3L	5kg	20 //	2,800円
C	L	5kg	35 //	3,700円
【普通箱入り】				
D	2L/3L	5kg	30 //	3,800円
E	2L/3L	3kg	20 //	2,500円
F	L	5kg	35 //	3,300円

【家庭用】

G	5kg	33 //	2,800円
---	-----	-------	--------

※出荷：12月15日～2月下旬

※送料別途。20kgまで関西1,000円、関東・甲信越1,100円

ご注文は

〒781-7412 高知県安芸郡東洋町大字河内203 田中農園 田中隆一さん  
(tel./fax. 0887-29-2500 e-mail: tanakan3@cronos.ocn.ne.jp)

※売り上げの一部を寄付していただいています。ご注文の際は一言「GENの紹介」と添えてください。